

### 第3回 旭川市民文化会館の在り方検討会 会議録（要旨）

会議名	第3回 旭川市民文化会館の在り方検討会
開催日	令和4年8月22日（月） 午後1時30分から午後3時30分まで
出席者 （敬称略）	参加者 全8名出席 五十嵐 真幸，伊藤 誌麻，上田 信津子，佐藤 淳一， 鈴川 雄太，竹田 郁，南 裕一，森 傑 事務局 4名出席 社会教育部長，文化ホール担当課長，市民文化会館長， 市民文化会館主任
会議の公開非公開の別	公開
傍聴者数	1名
会議資料	別紙のとおり

#### 1 開会

#### 2 議事

進行役：

本日は建替えの事例について、認識を深めていこうという内容になっており、まず話題提供をさせていただき、そのあと御意見を伺いたい。

建替えが良いか悪いかというよりは、建替えを想定した場合に、どのようなことを考えないといけないとか、どういうことが懸念されるかといったところについて、いろいろな視点から、自由に御意見を伺えればと思う。

大きく分けて二点の話題を用意しており、一点目は最近建築されたホールの事例について、もう一点はホールの建替えとは、どのような手順で、どのくらいの時間をかけ行われていくのかということについて、それぞれ御説明させていただく。

今日において、旭川市民文化会館と同規模の建物を建てようとした場合、建設の方向性が決定してから完成するまで、一般的に8年から10年程度を要する。人口減少を含め社会状況が大きく変化しており、建物完成まで必要と見込まれる約10年間を考えると非常に悩ましいが、その先を見据えた計画を立てる必要がある。

では、先に資料2から紹介していきたい。各施設の写真下部に、人口、敷地面積、延床面積といった情報が記載されている。旭川市及び旭川市民文化会館はそれぞれ

人口：約32万人

敷地面積：約11,500㎡

延床面積：約12,000㎡

であり、これらを念頭に置いて資料を見ていただきたい。

(資料2に記載された「可児市文化創造センター」、「茅野市民館」、「アオーレ長岡」と、「三次(みよし)市民ホール きりり」、「マルホンまきあーとテラス(石巻市複合文化施設)」について、進行役より事例紹介)

《事例紹介に当たって》

- ・資料の総事業費は、建築当時のものであるため、注意が必要  
現在は、延床面積10,000㎡規模の市民ホールを建築すると、事業費は100億円くらいと考えてほしい。
- ・建築面積は、建物を真上から見たときに、敷地に対して占める面積であり、あまり意識しなくて良いが、延床面積は、全ての床の面積を足したもので、建設コストに直結してくるものである。

○可児市文化創造センター

- ・インクルージョン(※1)をコンセプトとしており、演劇や音楽に親しみのない方、経済面を含めチケットを取れない方に施設に来てもらえるような取組を実施するなど、ソフト面で全国的に注目されている施設で、アウトリーチ(※2)活動等を通じて、施設を分け隔てなく皆に使っていただくということなどソフト的なプログラムに力を入れている。
- ・施設は郊外にあるが、敷地面積が広く心地良いため、イベントを行っていない日も多くの方が訪れている。屋外スペースをどれだけ持てるのかというのもポイントで、中心部でなければ人が来ないということではなく、施設の造り方次第という部分もある。
- ・最近の傾向として、大ホールは可児市のように3層構造のものが増えてきている。

## ※1 インクルージョン

：ここでは「ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）」のことを指す。

「全ての人々を孤独や孤立，排除や摩擦から援護し，健康で文化的な生活の実現につなげるよう，社会の構成員として包み支え合う」という理念のこと。（厚生労働省社会・援護局．「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書 平成12年12月8日．<[https://www.mhlw.go.jp/www1/shingi/s0012/sl208-2\\_16.html](https://www.mhlw.go.jp/www1/shingi/s0012/sl208-2_16.html)>，（参照 2022-8-22）

## ※2 アウトリーチ

：支援者が積極的に出向いていく援助のこと。生活上の問題・困難を有しているにもかかわらず支援を拒否するなどの人に対して，積極的に働きかけることを指す。

（「アウトリーチ」．池本賢一．『21世紀の現代社会福祉用語辞典』第3版．株式会社学文社．2022，p.4.）

## ○芽野市民館

- ・JR 駅直結の施設で，ホールに図書館の分室の図書室を複合化しているのが特徴。図書室は市民が滞在しやすく，ホールと複合化する事例が全国的に多い。
- ・施工当時の事業費は 50 億円であるが，現在では 100 億円かかると思っている。
- ・ホールの特徴として，座席が固定席でなく可変制のため，様々なイベントの性質に応じて自由にレイアウトを使い分けて実施している。
- ・音楽・演劇だけでなく，プロレスやバスケットボール，古着市など，施設側でイベントを仕掛けていくことで，ホールの空いている日がないように，積極的に取り組んでいる。
- ・展示室があるが，チケットを買わなくても，階段の間隙から展示物が見られるようにしている。たまたまホールに来た人が美術品に関心をもったり，展示室があることを知る機会として，展示品を隠さずに少し見せるような造り方を空間的に工夫しているのは，ユニークな取組である。

## ○アオーレ長岡

- ・長岡駅直結で，延床面積は約 35,000 m<sup>2</sup>で，規模が大きな施設である。
- ・規模が大きい理由は，市役所との複合施設であるためであり，面積の半分がアリーナ（ホール）で，半分が市役所である。
- ・事業費は 130 億円であるが，今では，多分 180 億くらいになると思われる。
- ・ここまで大胆に取り組むことができるのと利便性は高くなるので，人も集まりやすくなる。

- ・アオーレ長岡では、イベント等をマネジメントする市民組織と、利用団体のイベント開催の支援・相談を行う市民組織があり、この2つのNPO法人が施設の運営を担っている。
- ・施設の計画を立てて設計していく段階で、既にこの2つの団体を作っている。アオーレ長岡の取組は、市民団体の作り方が挑戦的で、勉強になることが多い事例である。

#### ○三次（みよし）市民ホール きりり

- ・郊外に立地し、隣が親水公園で、のどかな環境の場所にあるホール。
- ・規模としては旭川市民文化会館とほぼ同程度だが、エントランスホール（ロビー）がなく、入口に入るとすぐホワイエになり、ホワイエを開放しているのが特徴。
- ・ホールを囲むように通路が回廊になっており、ウォーキングなど運動のため施設に来る方もいる。
- ・ホールは3層構造になっている。3層構造のホールのメリットは、建築面積を小さくできることである。横に広がらないため、上手く造ることができれば、建築コストの抑制を図ることができ、また、敷地が狭い場合に有効な手法である。
- ・3層構造の課題として、3階から見下ろすため傾斜がついた椅子の配置になっており、利用者によって（特に子供や御年輩の方）は怖く感じる場合もある。
- ・運営上は、人数・イベントの規模に応じて、1階までしか開放しない、あるいは2階まで開放するというように、客席の範囲をコントロールできるため、大きいホールで、客席の空間が空いているということを防ぐこともできる。

#### ○マルホンまきあーとテラス（石巻市複合文化施設）

- ・震災復興関連施設として、北海道出身の建築家 藤本壮介氏が設計した建物で、立地場所は郊外である。
- ・利便性の高い場所に建っているものではないが、屋根が凸凹しているなど、ユニークな建物である。
- ・特徴的なのは、座れる場所がたくさんあり、テーブル・椅子だけでなく、ベンチシートなど、腰かけられるようなところをたくさん設けている。
- ・ホール利用者をどうもてなすかということも大事であるが、特に最近のホールは「日常的に市民がふらっと来て、気兼ねなく滞在できる場所をどう作っていくか」という点が重視されている。座れる場所の選択肢を多く設けるとするのは、そうした取組の分かりやすい特徴の一つ。
- ・ホールという建物の建設に際しては、大ホールの座席数をどうするのか等がメインの議題となる一方、最近では多大な金額をかけ、大きな面積で建てるホールをどのように有効活用していくのか、という点の検討が焦点となる事例も多い。

- ・一つの考え方として、市民の方々の日常利用、普段の生活の豊かさにつなげていくよう工夫すること、そして施設の利用率を上げることを企図した手段として、複合化という方法がある。図書室にせよ展示にせよ、いろいろな活動が施設に集まってくるような形を仕掛けていくことがポイントになる。

続けて、資料1を見ながら、ホールや市民会館を建設する際のプロセスについてお話しさせていただきます。

一般的に建物のライフサイクルと言われるものは、「企画・構想」→「計画」→「設計」→「施工」→「使用・維持保全」→「解体・リサイクル」というプロセスで構成されるが、今日、皆様に覚えていただきたいのは「企画・構想」、「計画」、「設計」の3点である。

建物を身体に例えたときに、「計画」というのは骨格と内臓の配置を決めるものであり、「設計」はそこに肉づけをしていく、髪の毛が長い、鼻が高いというようなことを決めるものである。「企画・構想」は「計画」のさらに前段階で、DNAレベルのコンセプトを決めていくものである。この「企画・構想」から「設計」に至るまでに、ホールの場合、一般的に5年程度を要する。

この在り方検討会は、構想のもう1個前の段階になり、「構想」をこれから練っていく前に、課題認識をするという位置付けの会議と考えてほしい。

一般的に公共施設の建設では、まず「基本構想」を策定した後、「基本計画」を策定し、設計事業者の選定に進んでいく。資料1は「(仮称) 苫小牧市民ホール建設基本計画」の概要版である。

一般に基本構想とは「施策や事業を実施する上での基本的な概念と姿勢を示し、それら施策や事業の目標と将来像を簡明に説明するものであり、建物の建設においては、建物の計画や設計を具体的に進めるためのガイドライン、大元の考え方」を指し、10,000 m<sup>2</sup>程度の建物を造る場合、この策定に通常1年程度をかける。

基本構想の検討体制としては、市役所内に推進部局として準備室などが設置されるのが一般的であり、また、財政面等について検討するため、市役所内部での検討会議が設置される。苫小牧市では、これらと並行して芸術の専門家や市民団体代表らで構成する「(仮称) 苫小牧市民ホール建設検討委員会」が組織され、市民の検討委員会と庁内の検討会議が互いに議論しながら基本構想を練っていった。他にも、検討委員会のメンバーだけでなく、広く市民の方々が参加するワークショップ等を実施し、1年間で11回程度、基本構想を策定するための議論を行った。また、議論にあっては先行事例を見ながら、これからの市民ホールがどうあるべきかということを考えるだけでなく、他の公共施設とどう連携するのか、公共交通とどのようなつながりをもつべきか、といったことを勉強しながら検討していった。

なお、先に説明した資料2は、他都市の先進事例をまとめた部分について、「(仮称) 苫小牧市民ホール建設基本構想」から抜粋したものである。

苫小牧市民ホールの建設検討においては、1年間かけて基本構想を策定した後、2年間かけて基本計画を策定している。一般に基本計画とは「施策や事業を実施する上での基本的な方針と内容を示し、公共施設の建設においては、計画設計を進めるための様々な与条件(発注者が設計者に対して与えた希望条件)を整理するもの」であり、新しい施設で想定される活動に対応する適切な規模・用途を定め、平面計画や面積等を考えていくとともに、将来どのように維持・管理運営していくかということも考え、まとめていくものである。

一般的に、基本構想の段階において建設地は確定していないことが多いが、基本計画ではコンセプトを練りながら、「この場所に、このくらいの面積で、ホールは何席」といったところまで定めていく。

苫小牧市の事例では、平成28年度に検討委員会の下にワーキンググループを3つ置き、そこで検討したものをさらに検討委員会に集約し議論する手法を取った。平成29年度には、具体的な面積や配置、人の動線などをワークショップで議論している。

11,000㎡～12,000㎡のホール建設には、100億円強の費用が想定されるが、この費用をどう捻出するのかという部分も、基本計画で一定程度押さえておく必要がある。

公共施設を建てる場合、直接発注とPFIという方法があり、直接発注は自己資産から費用を捻出して建設する方法である。PFIや民間による資金調達とは、民間に一旦費用を立替えてもらい、それを20年とか30年かけて分割払いで返していくというものである。100億円を超える建物を建てる事業というのは、旭川市くらいの30万人大都市でも負担が大きいため、PFIの事例も増えている。一旦民間に立替えてもらうので利子がつくが、ある年度に100億円超の支出が集中するよりも、20年間にわたって何億円かずつ支出していく方が財政的に安定するためである。

基本計画を議論する時点でこうした手法等を決めていなければ、次の設計者や建設事業者を選定するステップに進むことができない。よって、来年度に基本構想の検討を始めるとした場合、向こう3年以内にこうした内容を決定していかなければならなくなってくる。

苫小牧市では結果的にPFIを選択し、現在事業が進められているが、平成27年度に基本構想、平成28・29年度に基本計画を検討・策定した後、平成30年度にPFIを含め、適切な手法の精査を行った上で、令和元年度にPFIを選択する旨を決定し、PFIをするための調査を行い、令和3年度にPFI実施事業者を募集している。

「(仮称) 苫小牧市民ホール建設基本計画」の中で調査した事例として、平成25年に入札された豊中市立文化芸術センター(約13,000㎡)の建設費は約74億円であるのに対し、苫小牧市の概算事業費では80万円/㎡×約12,000㎡=96億円と試算されており、10年程度の間には1.2倍程となっていることから、この後の設計に際しては、100億円超の費用が見込まれている。

以上、前半は事例の紹介、後半は建替えを行うと仮定した場合に想定されるプロセスと時間の流れについて紹介させていただいた。紹介した事例やプロセスに関して、御意見や御質問などいただければと思う。

参加者：

事務局に質問であるが、最終的な整備の方向性は誰が決定することになるのか。

事務局：

本検討会の意見などを参考に、庁内でも検討し、旭川市教育委員会で方向性を決定する。

参加者：

進行役の話にもあったが、ソフト面の話がとても重要。紹介いただいた事例のように市民の方々と共存・共栄して一緒に運営していくにせよ、アートディレクターを置くにせよ、立派な建物ができても、ソフト面が安定しなければ、結局は箱物行政になってしまうので、そうならないことが大切である。

紹介された最近の事例では、敷地にゆとりがある郊外の場所に建設された施設が多くあった。現在地での建替えを検討するのも良いが、この場所でなくても良いのではと思った。例えば、報道ではイオン春光店跡地は、活用方法が決まっていないと聞けるが、そこであれば非常に大きなスペースを使うことができ、駐車場も設置できると思う。また、契約方法にもよると思うが、現施設の解体も含めて、一括して委託することができれば、解体費用を圧縮できるかもしれない。中心市街地に比べれば、土地の価格も安いと思う。

進行役：

敷地については大事な議題であり、そこを具体的に議論していくのは、「構想」・「計画」の段階になってくる。この検討会はその前段として色々な意見を出す場であり、この場で結論を出す必要はないと思う。

また、まちなかに建てるのか、それとも郊外に建てるのかということについては、「どのようなホールにするのか」というコンセプト次第であり、今後市民の皆様も含めて議論すべきことであると思う。

先程の説明の補足として、直接発注には、設計施工分離と設計施工一括という方式がある。住宅を建てる時、建築家に設計を依頼し、工務店等に建設してもらうのが設計施工分離方式であり、ハウスメーカーや工務店等に設計・建設を全部一緒に依頼するのが一括方式である。

日本の公共事業においては、設計と施工は分けて発注すべきという考え方が主流であった。これは、設計業務に施工の管理業務も含まれているためであるが、一方で、

近年は、一括方式、デザインビルドというものが費用圧縮の観点から増加している。これは、基本設計→実施設計→工事という発注行程に際して、設計施工分離方式の場合は、それぞれの行程で個別に予算を組み、支払うことになるが、設計施工一括方式の場合は、全部まとめて契約するので、契約金額の範囲内で事業者に工夫の余地があるためである。

設計料について、公共施設の建築では、基準があるので、世界的に著名な建築家であろうが地元の設計事務所でも、同じ規模の建物であれば、同じ金額になる。

また、設計者の選定方式には、入札・コンペ・プロポーザル・総合評価といった方式があり、日本で基本としているのは入札方式である。これは指定された規模・機能の建物をいくらで設計するのか金額を示してもらい、最も安い業者を選ぶ方式であるが、安く設計できる者は能力が高いかといえ、必ずしもそうとは限らないため、設計の質を重視する場合には、コンペ方式やプロポーザル方式というものが活用される。コンペ方式が設計案の良し悪しを審査して選ぶのに対し、プロポーザル方式は、様々な技術提案をさせ、事業を担う業者の能力を審査するものであり、最近では後者の方が増加傾向にある。

参加者：

国立競技場の建設に際して、ザハ・ハジド氏の案を見て、心が踊った経験がある。設計の経緯等は公開されていると思うが、市民は主体的に読まないと思う。デザインの案を公表し、皆さんはどの案が良いですか、というように市民の方々を巻き込みながら実施することができれば、市民の方々もきっとわくわくすると思うし、自分たちの税金が使われる施設の在り方を自分たちで選べるという形にもなる。せつかく建て替えるとしたら、市民の方も巻き込んで、内部機能も外観も、ソフトもハードも、大きな意味で、皆でつくり上げる形にできたら良いと思う。

進行役：

情報をどのように市民に正確に伝えていくのかという点に関しては、丁寧に行う必要がある、そうした意味で構想・計画はかなり緻密に行うことが大事である。

参加者：

文化会館もパブリックスペースなんだということを改めて思った。パブリックスペースには、オフィス・オープン・オフィシャルの3つの意味があり、公共施設であると同時に、開かれていること、皆が共有する場所であるべきと考えたとき、いろいろな人がアクセスしやすく、集まりやすく、開かれていて、共有できる場所であることを実現している事例は、とても理想的と感じる一方で、自分自身の日常生活を考えたときに、大きな建物を造って、その負担を担っていくことを考えると、ギャップを感じてしまう部分もある。



事例紹介の施設で、建築後、時間の経過に伴い、逆にデメリットのようなことも出てきたりしているのか。

進行役：

私が答えられる範囲では、デメリットには該当しないかもしれないが、例えば市民組織については、時間の経過に伴って世代交代や役割の引継ぎ等が当然に発生する。施設建設当初においては、非常に熱意のある初代の方々が組織を立ち上げ運営していたが、その方々が身を引いたとき、次代の方々が同じ熱意でできるのかという話は、当然出てくる。これは市民活動団体や組織が共通して直面する課題であり、どれだけうまくシステムとして構築できるか、ということが大事になってくる。

これは建物空間に関しても同様で、当初想定された使い方や目指したものにに基づきデザインされたとしても、後の方々がそれに共感しなかったり、そのコンセプトを目指して使用しなければ、こんな邪魔だよねという話になってしまう。例えば、開かれた議会を目指してガラス張りの議場を造ったとしても、結局スクリーンを下げて使用してしまうといったようなことや、オープンスクールで可動間仕切りを付けたり、変更するということが起こったりする。

先に紹介した文化ホールの事例も同様であり、当初、構想やコンセプトをもってプログラムを組んで実施していたけれども、それが後々引き継がれていくかどうかというのは、非常に大きな課題であり、それは他でも抱えていることかと思う。

参加者：

意見であるが、施設の場所に関しては、コンベンションの立場からすると、中心部にあってほしいと思う。例えば、思い浮かんだのは日章小学校の場所。常磐公園が近く、緑道があり、ホテルもさほど離れていない。あるいは別の案として、札幌市のようにコンベンションセンターが少し郊外にある等の形であると良いと思う。

また、市民感覚として、例示のあった施設がとても良かった。余白があることの大切さであるとか、文化ホールの話ではあるが、ホール機能の話ではなく、その他の使い方、日常の使い方の重要さという部分に共感した。

コンベンションの観点からも、地域のポスター展やお土産の販売等を希望する主催者の声があることから、屋根がありイベントや物産販売ができるような、フレキシブルな使い方ができる余白のスペースがあると良い。

以前、河口湖ステラシアターという施設を訪れたことがある。緑豊かな場所にある施設であるが、コンサートに行くと音が漏れ聞こえてくることから、それを目当てに聞きに来る方もおり、すごく豊かだと感じた。紹介された事例の中にも、階段から展示場がちらっと見えるというものがあったが、こうした工夫はとてもおしゃれで気が利いていて、普段使いにもつながる。なかなかできることではないが、そうした工夫についても考えてみたい。

富士吉田市には、屋上に行くときとすごく綺麗に富士山が見えるところがあった。お金もかからないし、これも紹介された事例にあった、最奥まで進むと良い景観が見える施設のように、大雪山が見えるようなつくりにするであるとか、建物の話だけでなく周囲と調和や日常の使い方なども議論していただきたいと感じた。

進行役：

今の指摘はすごく的を射ており、12,000㎡くらいの施設で、大ホール・小ホールと駐車場と緑地を整備しようと考えた場合、小学校の敷地くらいが必要になる。

資料1のとおり、苫小牧市では、現市民会館の隣の小学校跡地を全部使うことになっている。苫小牧市は地形的に細長く、市民の多くが車移動なので、とにかく駐車場が必要ということで、現市民会館のスペースを全て駐車場に割り当て、小学校の敷地をオープンスペースとホールに充てることになっている。

事務局：

現在の旭川市民文化会館も中央小学校の跡地である。

補足として、文化会館はもともと、もっと広い敷地を有していた。緑地帯や噴水、中庭、レストランもあった。今後、新庁舎建築現場事務所になっている場所が空き地になるため、外構全体の再開発という形で、前庭など余白スペースを設けることができる部分もあると思う。

参加者：

本検討会は、旭川市民文化会館の改築か新築かという話であるが、前回も触れたとおり、公会堂の存在というのは大きいと思う。大ホールと小ホールの他に、中ホールもある。新施設に中ホールは必要かどうかという話であるが、演劇関係の方は、公会堂が「ちょうど良い」と言う。

あと十数年で改築した公会堂が寿命を迎えることを含めて考えたときに、思い切って常磐公園の川のおもしろ館の場所を活用することができれば、相当の敷地を取ることができる。検討してみても良いのではないかと思う。

進行役：

大きなホールが郊外に配置される理由は複数あり、住宅の多い地域に近接した場所に巨大な建物が建設されると圧迫感があること、車利用が多い場合は、交通量の問題が出てくること、音の問題も出てくることなど、それらを解決しながら両方の環境に配慮するとなると、御意見にあったような大公園に建てるというのは、自然な流れであり、駐車場の確保もしやすい。

参加者：

事例として紹介されたマルホンまきあーとテラスは非常に開放的で、子供の目線でわくわくするような仕掛けが印象的であった。進行役の話にもあったが、建設までの10年間で、メンバーは変わってしまう。一方で構想着手の時点で10歳の子供は、完成時にはまだ20歳。小学生の子供たちが面白いと思ってくれて、それを実現した施設であれば、その子供たちは完成時にも関心をもって使用してくれると思う。

今の文化会館には好感をもっているが、一般利用が少ないと感じる。周囲では、本人又は家族が音楽をやっている子供は利用経験があるが、演劇等は見ることがないという子供が多かった。子供たちに演劇を見てほしいという思いはあるが、子供向けの演劇は費用が高めで、自分も躊躇してしまった経験がある。他にも、常磐公園周辺には素晴らしい図書館もあるが、行ったことがないという子供たちが多く、意外に感じた。旭川には彫刻美術館等もあり、文化的なレベルが高いまちだと思っているが、それらが一体化しておらず、もったいないと感じる。

日常利用や、音が漏れるような仕掛け等の話もあったが、子供たちが見て、わくわくするかどうかということをしごく大事にしたい。今、旭川にあるものを子供たちにたくさん見せ、誇りに思ってもらえることができれば、子供たちの関心につながると思う。どんどん使ってもらい仕組みをつくっておき、子供たちがどういうところが気になっているかを把握し、旭川市の子供たちが好きなことをできるだけ盛り込めるよう、接点を近くすることができれば良いと思う。紹介された事例のように、子供たちが勉強しに行きたくくなるような施設であれば、ホールに興味がない家族の子供でも、自分の居場所だと思ってくれる場所になるのではないかと感じた。

進行役：

世代の話でいうと、「(仮称) 苫小牧市民ホール建設基本計画」では「事業アイデア集」という項目があり、これはワークショップを通して100近い事業のアイデアを集めたものである。このとき、小学生ワークショップ、中学生ワークショップ等も実施し、率直にどんなことをしたいか、どんな場所だったら来たいか、といった話をし、事業を考えた。これから構想計画を立てていくとき、大人たちが集まったかしまった検討会も必要であるが、実際に施設を利用する次世代の方のことを考えていくことは、しごく大事なことだと思う。

今やどこでもワークショップを実施しているが、苫小牧市ではイオンモールで実施した。苫小牧市街地の模型を作り、アイデア集の事業を全部パネルで並べて紹介し、ショッピングに来た方々を対象に、参加したい事業にシールで投票してもらった。

これは、先ほど御意見のあった市民への発信とも関係しており、こういう計画をこういうアイデアで今やろうとしていますということをしどう発信するのか、という視点で考えたとき、子供連れの御家族の方であるとか、ふだん計画とか構想といってもなかなか見る余裕がない方々に触れていただく機会を設けたいと思い実施した。

今後、旭川市が計画を立てるときには、こうした取組も検討していただけると良いと思う。

参加者：

常磐公園は、旭川市民にとって馴染み深い場所だと思う。河川敷を使えば駐車場も確保しやすい。

NPO 法人や市民と一体になった取組というのは理想的であるし、私たちの税金で建てられることから、特定の利用者に偏らず、使用方法は平等であるべきと思った。

また、運営においては、熱意がすごく大事だということも強く感じた。建設に関わる方の熱意を、完成後、実際に使用・運営していく方に引き継いでいくために、教えていくことが大事だと思う。

進行役：

紹介した可児市文化創造センターでは、館長がインクルージョンに取り組んでいた。芸術もすごく大事であるが、投入された税金が、特定の趣味の人のところだけに行く形になってしまっただけでは説得力がない。そうした方々も大事にしながら、広く文化芸術に触れる機会をどう提供するのかということを実践した。それは、建物の工夫だけでなく、経済的な理由などで公演を鑑賞することができない市民にチケットを提供する仕組みであったり、プログラム自体を誰が考え、誰が運営するのかという組織づくりがとても重要になる。

また、アオーレ長岡では、2つのNPO法人が施設の運営に関わっており、その立上げが上手かったと思う。それは、お膳立てした職員の方がやり手だったというのもあると思うが、2つの組織の構築を行いながら、建物の計画を練っていったのは素晴らしい。建物を設計してからではなく、こういう事業を実施したいから、こういう建物を設計するという流れで取り組まれるべきと思う。

参加者：

これまで公会堂やクリスタルホールには何度か行ったことがあるが、文化会館にはあまり来たことがなかった。先日、文化会館に一人で来る機会があり、近くの駐車場に車を停めた後、車椅子で来たが、車寄せ部分以外にも段差があって車椅子では進入できなかったり、進入可能な場所は急勾配の斜面だらけで大変だった。また、先行事例の写真と見比べると、文化会館は暗くて圧迫感があるように感じた。

私たちがいろいろな場所へ行くときに注意する点として、雨や雪など天候の他に、入口や施設内が混雑しており、無理には行けないという場所もある。逆に、車を停めるところがあり、あまり混雑しない施設であれば居心地が良く、機会さえあれば行くといったこともある。

また、文化会館の現状として、コンサートに関心がない方にとっては、来る機会がないというのが現実だと思う。現在、市役所の新庁舎を建設中であるが、ここに建てるとしたらどう関連付けるとか、市民が集まるようにと言われてはいるが、コンセプトがなければ、全部ばらばらでちぐはぐなものになってくる。他地域と見比べると、旭川はなぜこんなにも寂しいんだろうと思うくらい、寂しい街並みだなと感じた。私も旭川生まれ旭川育ちなので、地元の魅力を感じなくなってきたのか、何か変える力になりたいと思う。

進行役：

補足として、苫小牧市では、市民会館、文化会館、労働福祉センター、交通安全センターという4つの老朽化した施設を集約して新しい施設にしようという複合化の取組である。この4施設のうち、市民会館と文化会館は、それぞれホールと会議室があり、機能的に似た者同士である。市民は両施設を使用していたが、どちらも老朽化しており、また会議室の利用率がどちらも3割程度であれば、一つに集約しても良いだろうという話である。残る2施設は、機能的な視点からするとあまり関係はないが、これを何故一体にしたのかというと、ホール芸術だけの施設にせず、交通安全センターであれば、免許更新があるので市民も来るということで、できるだけ常に人がいる状態を作ること、掲示物等を通じて間接的に芸術分野に関心をもってもらったり、こんなに心地良い場所があるなら、また今度来てみようかと思えるような形でのきっかけづくりとして、集約したものである。

意見にもあったが、仮に旭川市が今後、建替えという方針とした場合には、文化会館単独での建替えなのか、他の老朽化している施設等を合わせた集約複合的な建替えなのかというのは、これから詰めていかないといけない部分になる。

2点目の補足として、PFI方式というのは、20年間あるいは30年間にわたって、公共施設の建設から維持管理、公共サービスの提供、ハード・ソフト両方を含めた事業をお任せする仕組みであり、事業者を募集する際には、設計、工事、維持管理、運営マネジメント、金融、全て合わせたチームを組んでもらい（これを特別目的会社「SPC」という。）提案してもらい形を取る。事業者の立場からすると、建設費の立替え+利子的なもの、公共サービスを指定管理的に提供する費用が、継続的に自治体等から支払われるため、安定的収益が見込まれる。

BOTとBTOはそれぞれBuild Operate TransferとBuild Transfer Operateの略称で、日本ではPFIの事例のうち、90%以上がBTOである。BTOは、建物が建った後に所有権を自治体等に譲渡した上で、その後の維持管理運営をSPCが行っていく仕組みであり、BOTは、20~30年の施設運営が全て終わった後、自治体等に所有権を譲渡する仕組みである。

BTOは、施設建設後に自治体等が所有権を持つので、指定管理に近いような形になり、その趣旨は分割払い、お金の立替えをしてもらっている、という話になる。対して、BOTでは、施設運営期間中は事業者に所有権があり、事業者に権利・責任がある状態で管理運営を行うことから、自分たちにリスクがかからないように、また収益性の向上に努めるなど、民間の創意工夫が働く余地があり、本来的にはBOTの方がPFIの趣旨にかなっている。

一方で、PFIの場合は、事業者が収益を上げられる仕組みを作らなければならないので、例えば自主事業のチケットの価格設定等はSPCが設定することになり、誰でも手軽にという形が本当に実現できるのかというのは課題になる。

苫小牧市では、当初、従来どおりの直接発注方式を検討していた。これは、苫小牧市が興行での利用よりも市民活動を重視しており、いかに誰もが負担なく使えるかということを見ると、利用料金にしろ空間の使い方にしろ、ハードルを上げるべきではない、という公共の価値観から、直営の公共施設にした方が、市民目線になるのではないか、というのが当初のスタートラインだった。そうしたことも検討していたが、財政的負担を考慮し、結果として、PFIのBTOでの建設になったという経緯がある。

本検討会では、前回は大規模改修について、今回は建替えについて、それぞれ皆様から御意見をいただいたところであるが、次回以降は、それらを総合して「大規模改修を行った方が良いか、それとも建替えが良いか」ということについて、それぞれのメリット・デメリットを整理しながら、御意見をいただく会になると考えている。

### 3 閉会